

下瀬川 徹, 渡辺 守 (監修)
木下芳一, 金子周一, 檜田博史, 他 (編)

専門医のための消化器病学 第3版

寺野 彰

学校法人獨協学園名誉理事長/獨協医大名誉学長

『専門医のための消化器病学 第3版』が、2021年11月に上梓された。8年ぶりの改訂である。2005年4月に、小俣政男教授、千葉勉教授によって編さんされた本書は、「専門医」を対象にしたものであったから、初めからかなり高度な内容をめざしていた。その初心は、第2版そして今回の第3版へと受け継がれ、いわば消化器病学論文の集大成とでもい

うべき記述で構成されている。執筆者も若手消化器病学者を核として、われわれのようないわば高齢消化器病学者の名はほとんどみられず、新鮮な雰囲気を出している。構成も、通常みられる全体としての総論、各論ではなく、いきなり食道疾患から入っている。そのいわば各論の中で、総論と各論を論じており、ある意味でわかりやすいと言える。内容も通常の記述に加えて、「Topics」や「専門医のポイント」などが挿入され、先に述べたような論文的な要素も加えてある。これらは本書の1つの特色ともいえる部分である。

ただ次版で修正したほうがいいと思われる部分としては、これらの本書の特徴と思われる部分が必ずしも統一されていない点である。記述の

一部に簡潔すぎる部分もあり、これらは本書を通して統一すべきではなかったかと思われる。さらに付け加えると、文献が、和文ばかりの項目と英文ばかりの項目にはっきり分かれている感があり、この辺りも編集者として統一をめざすべきではなかったか。

しかしながら、これだけの高度な内容を持つ本書は、高齢の評者もやや戸惑いながらも、残りの短い生涯、何とかマスターすることにチャレンジしてみようとの意欲を湧かした。評者は、この書評を依頼されて、まず苦手の痔瘻の項目から読み始めた。しかし、かなりハイレベルの内容であるから、そこに時間を費やしてしまい、残りの部分は丁寧に読めたとは言えない。この正月期間に、腰を据えて立ち向かってみようと思っている。学長職や理事長職などに時間を取られて、しばらく臨床から離れざるを得なかったわが身にとって、当座挑戦すべき対象ができた。Corona時代の老後の過ごし方に意義を見出したところである。

若い消化器病専門医あるいはそれをめざしている諸君が、このレベルにおいて、消化器病学全体を修めれ

ば、わが国の消化器病学の未来は明るいと思われる。今後のわが国の専門医制度をどのように扱うかについては、評者もその成り立ちにおいて関与していたので、強い関心を持っている。ただ果たして、このままで素晴らしい専門医制度が構築されるのか、若干の危惧を持たざるを得ない。国際的に通じる専門医制度の確立を希望しているが、本書がその一遇において重要な役割を担うような気がしている。

最後に、本書の図表、特に写真が別ページではなく本文の中に素晴らしい形、色彩で挿入されているところに、編集者は並大抵の苦労ではなかっただろうと推察する。

胃潰瘍や肝炎がある意味で解決されようとしている今日、消化器病学の未来は決して容易なものではないが、医学は人を治すのが本来であるから、医学全体としての位置付けで消化器病学をみていく必要はあろう。

●B5/頁 732/2021年11月

定価：16,500円

(本体15,000円+税10%)

[ISBN978-4-260-04579-7]

医学書院 刊